

## P-153

盛岡赤十字病院における持参薬への薬剤部の関わり  
盛岡赤十字病院 薬剤部

梅村 景太、蒲澤 一行

【はじめに】薬剤師による入院患者の持参薬の管理は安全確保上極めて重要であり、さらにDPC導入病院では医療費削減の観点からも病院経営に大きく貢献できる。盛岡赤十字病院（以下、当院）においては平成18年からDPCが導入されたが、医療安全上の観点より持参薬は一部の薬剤（精神科領域の薬剤）を除いて院内採用薬剤への変更を行い基本的には持参薬は使用してこなかった。しかし昨年度、持参薬の使用が検討され持参薬使用の運用手順・持参薬運用フローが作成され、昨年6月より持参薬の使用を開始した。そこで今回、持参薬への薬剤部の関わりを報告する。

【薬鑑別方法】当院では昨年まで、薬剤鑑別は手書き伝票を用いていたが、現在では服薬指導支援システム（スーパー・サポート・システム）（以下、SSS）の中にある持参薬鑑別ツールを用い薬剤鑑別を行っている。

【薬剤鑑別数】薬剤鑑別数は平成18年度611件（外来：143件、入院：468件）平成19年度635件（外来：71件、入院：564件）平成20年度768件（外来：221件、入院：547件）、平成21年度782件（外来：163件、入院：619件）、平成22年度1751件（外来：143件、入院：1608件）となっている。

【まとめ】薬剤鑑別数は、昨年の6月からの持参薬開始に伴い約2倍以上増加した。持参薬開始以前は、一部の病棟しか薬剤鑑別を依頼しておらず、積極的に薬剤部が関与できていなかった。今後は、さらなる積極的な関与が必要になる。SSSによる薬剤鑑別は、利便性が非常に良いと考えられる。また、薬剤を入力すると薬歴管理にも反映され、持参薬と入院時新規処方薬との相互作用のチェックも可能で医療安全上非常に有用である。

## P-155

薬剤師による手術前血栓予防薬確認について  
静岡赤十字病院 薬剤部

杉上 香織、堀内 保孝

【目的】当院薬剤部では平成19年1月下旬より、予定入院患者を対象として入院時持参薬管理を開始し、入院受付時に持参してきた薬剤を薬剤師が面談しながら確認している。しかし、入院時持参薬管理開始後、抗凝固薬・抗血小板薬を継続服用していたために、手術が延期になってしまったケースを経験し、入院時持参薬管理のみでは薬剤の適切な管理はできないと限界を感じた。そこで、平成22年9月より、薬剤師による手術前血栓予防薬確認を開始。当初は整形外科限定にて行っていたが、同年12月より外科、翌年1月より泌尿器科、2月より婦人科を追加し、現在は全外来診療科を対象に確認を行っている。

【方法】手術・検査が決定した当日、診療科は対象患者に「手術前血栓予防薬確認票」を渡し、薬局窓口を持参するよう説明。薬剤師は当日中に薬局窓口にて患者と面談し、確認票を作成している。確認項目は服用薬・処方元の医院名・医師名・処方目的・一般用医薬品・健康食品服用の有無。確認票は、作成後、診療科に提出している。お薬手帳を持参しない場合や薬識不足の場合など、その場で確認できない場合には、電話・FAX・再来院などの方法で連絡をいただき、医師がより早く指示を出せるようにしている。

【成績】確認開始から約8ヶ月が経過し、開始当初は月平均30件前後であったが、現在では月60件を越えている。99%の症例がその場で確認できており、そのうち28.5%は血栓予防薬を服用していた。また、薬剤の効能を知らずに服用している患者も多く、面談しながら効能を説明することで患者の薬識向上にもつながっているように思う。

【結論】入院時持参薬管理に加え、手術前血栓予防薬確認を行うことで、入院患者・周術期の薬剤管理を適切に行えるようになった。今後も、スムーズに確認が実施できるようにしたい。

## P-154

日赤薬剤師会「薬剤部の活動状況調査」  
2. 薬剤指導管理業務等の過去との比較

益田赤十字病院 薬剤部<sup>1)</sup>、日赤薬剤師会薬剤業務委員会<sup>2)</sup>

西園 憲郎<sup>1,2)</sup>、我妻 仁<sup>2)</sup>、品川 博行<sup>2)</sup>、  
八巻 俊雄<sup>2)</sup>、藤掛 佳男<sup>2)</sup>、跡部 治<sup>2)</sup>、津田 正博<sup>2)</sup>、  
矢野 光<sup>2)</sup>、大竹 弘之<sup>2)</sup>、町田 毅<sup>2)</sup>

【はじめに】病院薬剤師を取り巻く環境が大きく変化している渦中で、医療の合理化、医療の質の保証や安全な医療の提供が求められている。病院薬剤師にも薬剤管理指導業務、プレアポイド報告等今以上にさらに充実することを求められてきた。このような背景の中で、日赤薬剤師会では薬剤業務についてのアンケート調査を実施し、全施設の業務内容・業務量を集計し、さらに過去との比較を出した。第2報では薬剤管理指導業務、プレアポイド実施状況等について述べる。

【方法】1. アンケート方式 2. 対象：全国赤十字病院（分院含）92施設 3. 調査実施月：平成22年10月

【結果】薬剤管理指導業務では実担当者1人当たりの薬剤管理指導1ヵ月算定件数の全国平均は66.4件であった。また、総入院患者に対して70%以上の患者に服薬指導を実施していると回答した施設数は12（13%）であった。一方、病院薬剤師の職能アピールができ、地位向上に繋がるとされる日病薬へのプレアポイド報告実施病院は全体の39%で、年間100件以上報告は僅か3施設であった。病棟で薬剤師が入院患者の配薬業務を実施している施設数は24（26%）であった。簡易懸濁法を実施している施設数は56（61%）と年々増加していた。

【考察】医薬品の適正使用を通じて薬物治療の質的向上に寄与するには、薬剤管理指導業務が最も重要な業務であり、患者や他の医療従事者にも理解されやすく、しかも、診療報酬上からも高く評価されている。しかし、その算定件数や稼働率には病院間でバラツキが見られている。医療安全が叫ばれている昨今、病院薬剤師の病棟での活躍はこれまで以上に充実したものにしていかなければならないと考える。

## P-156

日赤薬剤師会薬剤部の活動状況調査1. 院外処方箋発行状況等の過去との比較

石巻赤十字病院 薬剤部<sup>1)</sup>、日赤薬剤師会薬剤業務委員会<sup>2)</sup>

我妻 仁<sup>1,2)</sup>、西園 憲郎<sup>2)</sup>、品川 博行<sup>2)</sup>、  
八巻 俊雄<sup>2)</sup>、藤掛 佳男<sup>2)</sup>、跡部 治<sup>2)</sup>、津田 正博<sup>2)</sup>、  
矢野 光<sup>2)</sup>、大竹 弘之<sup>2)</sup>、町田 毅<sup>2)</sup>

【はじめに】激変する昨今の医療環境の中で、病院薬剤師の業務は多種多様化している。癌治療、緩和ケア、感染制御、栄養療法、糖尿病治療、褥創治療、在宅・介護、など多くの現場において薬剤師への期待は大きく膨れ上がり、日常の基本業務内容も拡大してきた。そのような中、日赤薬剤師会では毎年薬剤業務の推移について調査している。第一報では、院外処方箋発行状況等の過去との比較について報告する。

【方法】1. アンケート方式 2. 対象：全国赤十字病院（分院含）92施設 3. 調査実施月：平成22年10月

【結果】H21年とH22年では減床病院が13%で、年々稼働病床数を減らしている病院が多くなっていることが判明した。また、病床数減少に伴い100床当りの正職薬剤師平均人数は3.68人と、昨年の3.64人より増加となっていた。全国赤十字病院で80%以上の院外処方箋発行率の病院は年々増え続け、4年前の57施設から昨年は67施設まで増加した。一方、院外処方箋未発行や僅少の7病院では、5病院が今後も発行予定がないと回答していた。今年度から実施された長期実務実習では、受入れ学生数がない病院が1期で53病院、2期で41病院、3期で40病院あった。また、治験事務局を設置している病院は84%で、その事務局責任者は薬剤師が79%と大半を占めていた。注射薬混合調剤業務では実施している病院は85%、外来化学療法の実施施設病院は82%であった。

【考察】昨今の厳しい診療報酬改定により、今回の調査でも稼働病床を減らしている病院が増えていることが判明した。薬剤師も、顔の見える医療人としての定着化を今後も図り人員削減に陥らならないように個々が自己啓発することを期待したい。